隣のとめぽさん

御劔剣次

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
隣のとめぽさん

【Ｎコード】
Ｎ５２６８Ｃ

【作者名】
御劔剣次

【あらすじ】
僕ん家の隣には、かなりよりさらに上位の変な人「とめぽさん」がすんでいる。僕はその人の弟子で、とめぽさんに振り回されて大変な日々を送る。

僕ととめぽさん　そのいち！（前書き）

笑える表現が少ない気がする……いや、少ない

僕ととめぽさん　そのいち！

僕の名前はリョータ。現役バリバリの中学二年生。かなり背伸びしたいお年頃。自分で言うのもなんだけど。

僕は普通の人だった。あの人に出会うまでは。

僕ん家の隣に、笹野さんという女の人が住んでいる。その人は、魔法使いだ。決して、僕の頭がおかしかったり、ヤク漬けで精神がイっちゃってて幻を見たとかではない。本当に使うのだ、魔法を。信じてはくれないだろうけど。

その人は、自分のことを「とめぽ」と呼ばせる。変わった人だ。

そのとめぽさんと僕が出会ったのは、小学校五年生の時。学校からの帰り道、公園の前を通りかかったときだった。

「……子供か。いや、妥協しよう。背に腹はかえられないし。おーい、そこの少年」

呼ばれて僕は、上を見上げた。大きな木の枝に、女の人が逆さまにぶら下がっていた。薄い水色のワンピースを着ていて、裾の部分が捲れないように両手で必死に押さえている。

「少年、すまんが降りるのを手伝ってはくれんか？」

僕はうなずいた。正直なところ、助けている途中に中が見えないかなと少々期待していた。

「どうすればいいの？」

木登りは苦手ではなかったから、木に登って助けられれば見えるかも、などと考えていた。表情に出さないようにしていたが。

しかし、返ってきた言葉は、僕の予想外の言葉だった。

「そこの杖を拾って、こっちに投げて寄越してくれ」

そう言われて、足元を見る。すると、さっきまではなかったはずの立派な杖がそこにあった。先っぽに紅い玉がくっついた、いかに

もな杖。
「これ？」
「そう、それだ」
僕は少々残念に思いながら、その杖を拾った。意外と軽かったため、これなら僕でもあの人のところまで投げられると思った。
両手で持ち、思い切り放り上げる。その人は片手を裾から離し、杖を掴んだ。勢いを付け過ぎたのか、杖は女の人の手を軸に回転、玉の部分が女の人の頭を直撃。
「っ……少年、覚えておけよ」
この時僕は、ヘビにでも睨まれたかのように動けなかった。
女の人は杖をくるくると得意気に回していた。次の瞬間、僕の目の前で不思議なことが起きた。
女の人の体がふわっとなったと思うと、空中でくるりと半回転。そのまま地面に降り立った。この時僕は、そのワンピースの中が見えたのだったが、そんなの気にしている余裕はなかった。口をあんぐりと開け、女の人を呆然と見つめていた。
「少年、一応助かった。だが、忘れるなよ。頭は痛いしパンツを見られたのだからな。普通なら半殺しだ」
僕は驚きから恐怖に感情が移った。そんな僕を哀れに思ったのか、女の人はため息を吐いた。
「だが、半殺しは次にあった時にしよう。私に二度と会わないことを祈るんだな」
フン、と鼻で息を吐くと、杖の玉のほうを僕向けた。
「それと、今私が使った魔法のことは忘れてもらうぞ」
そう言うと、女の人は杖を僕の目の前で一回転させた。僕はと言うと、こんな面白いものを忘れてたまるか！　といった勢いで、女の人の後ろにある木をぼうっと眺めていた。
「さらばだ少年」
杖を肩に担ぐと、意気揚々と女の人は去っていった。僕はと言うと、魔法にかかったふり――かかったことはないから、テキトウに

ぼーっとしてみた――をして、女の人がいなくなったのを見計らって走って家に帰った。
家に付くと駆け込み、すぐに部屋に滑り込んだ。そして女の人の使った魔法を思い浮べる。
「……使えないかな、僕」
でも、やってみようと思っても、やり方がわからない。テキトウに念じてみたり、跳んでみたりしたけど、やっぱり駄目だった。
友達に話そうかと思ったけど、信じるやつなんかいなさそうだったから、やめた。
次の日、祝日。休みの日は友達と山に虫を捕まえに行くため、朝から大張り切り。麦わら帽子、虫取り網、虫カゴ、水筒、おにぎり。全部準備し終え、サンダルを履く。
「行ってきまーす！」
元気よく家を飛び出し、左に曲がる。すると、隣の家の笹野さんが新聞を取りに玄関に出ていた。ご近所付き合いはあいさつから。
「おはようございー、ま……す……」
笹野さんの顔を見た瞬間、全身の血が冷えるのを感じた。だって、笹野さん、昨日の魔女さんなんだもの。
「おや少年、おはよう。また会ったな。おまえの家は隣だったのか、偶然だな」
笑顔で語りつつ、どこからともなく杖を取出し、さらに一言。
「これも何かの縁。上がっていけ。“歓迎”するぞ？」
「いえ、えんり……」
それ以上、言えなかった。だって、向けられた瞳が、拒否することを許していなかったんだもの。顔は笑ってるけど、目は真剣（マジ）だもの。
こくりとうなずく。僕に残された最後の選択肢。
「……おじゃまします」
二度と戻っては来れない死地に赴く兵士の如く、僕は真っ青な顔でつぶやいた。

「なにもそんな悲しい顔をするな。たかだか半殺しだ」
やっぱりですか。心の中で滝のように涙を流す。
「……と、まあ、冗談だ。そんな泣きそうな顔をするな」
なら最初から冗談って言ってください。子供は信じやすいんですから。て言うか、あんな状況じゃ誰も冗談だとは思わない。
「言ったろ、これもなにかの縁。助けてくれたお礼だ、茶をいれよう」
今考えると、妙なしゃべり方するな、笹野さん。見た感じ、うちのお母さんより若いのに。下手すると、お姉ちゃんくらいかな？
そんなこんな考えていると、笹野さんはお茶とお菓子をお盆に乗せて持ってきた。
「ほら、飲め。ぬるめにしてある」
有難い。僕は猫舌だから、熱いのは苦手だ。
「いただきます」
お茶を二人ですする。おいしい。お茶のことはよくわからないけど、渋みがないまろやかなお茶だ。
「……あ！！」
ことり、と音がした。隣を振り返ると、どうやら笹野さんは手を滑らせたらしく、湯飲みがテーブルの上に転がっている。お茶が床にもしたたる。
「ぞ、雑巾はどこだったかな」
慌てる笹野さんに一言。
「魔法でなんとかできないの？」
僕がそういうと、ピタリと笹野さんの動きが止まる。しまった、僕は魔法のことを忘れている、という設定だったっけ。
冷や汗がダラダラでてきた。ゆっくり振り返る笹野さんが恐い。
「しょ、少年。今、なんと言った？」
首がこっちに向くごとに、殺気とやらを感じる。恐い。はっきり言って、顔を合わせられない。
「い、いや、別になにも？！」

無駄とわかっていても、嘘を吐く。笹野さんが近づいてくるのが、気配でも足音でもわかる。
こ、ここ、コロサレル！！！？
「少年、なぜ、魔法を、知っている？　わかりやすく、詳細に、私に教えろ」
恐くて顔を合わせられない。でも、本当のことを言っても嘘ついても殺されそうだ。
仕方ない。覚悟を決めよう。小学五年生の命、ここに見事咲かせてみせよう！
「えと、えと……忘れさせる魔法にかからなかったというか、杖をみなかったというか……」
嘘は、吐いてない。杖を見つめなかったから魔法にかからなかった。
「……少年」
「はいっ！」
死ぬ！！　お母さん、ごめんなさい。僕、隣の笹野さんに殺されるよ……。
「私の魔法にかからないとは、大したものだ。気に入った。弟子にしてやる」
……はい？　今、なんと？
「聞いてなかったのか？　おまえを私の弟子にしてやると言うのだ」
……ほえ〜！？　いや、今のセリフなし。
えー！？　で、弟子って……。
「なんだ、うれしくないのか？　だったら半殺しにでも」
喜んで弟子になります。いや、して下さい。
こうして、あれよあれよという間に、僕は笹野さんの弟子になった。
「おおそうだ、少年」
「はいっ何でしょう！！」
「私のことは「とめぽ」と呼べ」

え？　なんで？

「細かいことは気にするな、男なら」

こうして、僕ととめぽさんの出会いは果たされました。

それにしても、なんでとめぽさんはとめぽと呼べと言ったんだろう。中二の今でも、すっっっごい謎。この謎が解ける日は来るのだろうか？

そのに！

中二の夏休み。解放感と束縛感の両方が僕を襲う。半端のない宿題の量。だはーっと涙が出そうだ。

仕方ない。きちんと計画を立て、一日三ページくらいやっていくか。とりあえず今日は遊ぼう。だって、もう五ページ終わらせたから。

外に飛び出して一番に目に入ったのは、自宅の玄関から半身だけ表に出し、手招きしているとめぽさん。

恐い。微妙に長い髪が顔に掛かっていて、さらに恐さを演出している。

「こい、リョータ」

行かなきゃまた枕元にヘビかなんか送り込まれるんだろうな、たぶん。

「なんですか？　これから友達とサマーバケーションをおもいっきり楽しもうという矢先に」

今やとめぽさんはあまり恐くはない。いや、恐いことには恐いが、昔ほどじゃない。今では時々立場が対等になる。ごく稀に僕が上になることもある。師弟関係なのに。

「うっ、す、すまんな。しかし、ちぃと一大事なんだ。頼む！」

頭を下げられてしまった。

まあいいか。特に友達と約束してたわけでもないし。

「仕方ないですね」

ふうっとため息を吐いて、とめぽさん家の玄関をくぐる。

この人の家は一人暮らしであるためか、ものが極端に少ない。玄関一つとっても、郵便受けの手紙や新聞を取りにいく用のサンダルと、僕を呼びに来たり、近所への買い物用の運動靴と、あとは遠出用の少し高価な靴くらいしかない。壁には鏡がかかっており、下駄箱の上には花瓶。花はすっかり枯れはて、玄関の見栄えをマイナス

五くらいしている。
とめぽさんは普段着であるワンピースに、魔法補助用のリュックを背負っている。
妙に似合う後ろ姿。まるで近所の丘にハイキングに来た中学生のような……。そんなことを口に出せば、叩き潰されるか吹き飛ばされるか。とにかく無事では済まないだろう。
「で、用事ってなんですか？」
そのことを聞くと、一瞬ビクッと肩を震わせる。この人にこんなリアクションさせるなんて、相当な問題が発生してるんだな。
「じ、実はな……」
……。
……。
――ほうほう。なるほど。
「で、僕にどうにかしてほしい、と」
「そうだ。こういうことはおまえにしか頼めん」
いつものとめぽさんらしからぬ発言。この人が人にものを頼むなんて、半年に……いや、一年……いや、十年くらいに一度だろうな。
まあ、そんな人の頼みを無下にしたら、こっちが危ない。受けるしかない。
「わかりましたよ。まったく、バッタが庭に発生したからって……」
ベランダから庭に出てみて絶句。
バッタ？　そんな生易しい生き物は、視界に存在いたしませんが？
「……あのー、とめぽさん、これバッタ？」
「あの目、触角、体、強靭な足。これをバッタと呼ばずしてなにをバッタと呼ぶ？」
「いや、でも……ええっ？！」
非現実。まあ、とめぽさんの弟子に――強制的に――なってから、非現実が日常的になったとはいえ、突然突き出されたら驚く。
だって僕、常人だもん。
「いつもの杖でぱぱっと」

「出来ればとっくにやって、今頃おまえは友達とサマーバケーションを楽しんでいる頃だ」
非現実バッタの群の中にぽつんと落ちている杖を指差しながら言うとめぽさん。ああ、あそこにあったんだ。
「じゃあ、杖、僕取ってきますんで、後頼みますよ？」
「うむ、そのためにおまえに来てもらったわけだしな」
そのためだったのか。まあ、こんな異常バッタ共の退治じゃなかったからよしとしよう。
バッタ。こいつをそう呼ぶのには抵抗あるなぁ。たしかにバッタなんだけどさ、像みたいにでかくて、二本足で立ち上がってる生き物をバッタって呼ぶのはどうかと思う。
あ、いい表現思いついた。巨大超リアル仮〇ライダー。……仮〇ライダーに失礼だった。
「そーっといきゃ大丈夫かな？」
一歩、庭に踏み出す。バッタ達は、一斉に行動を止め、僕をみる。僕はゆっくりと後ろに引いた。
「……あのー、とめぽさん。もしかしてもしかすると、彼らは縄張り意識が強かったりしませんか？」
「む、そうだな。強いぞ」
厄介！！
杖を取るのも一苦労だな。こういうときのとめぽさん頼りだけども。
「とめぽさん、便利グッズはありません？」
「ああ、あるぞ」
あるなら最初（はな）からだせよ！！　と言う気持ちを、拳を震わせるだけに止め――なおかつ隠して――、便利グッズを待つ。
便利グッズとは、その名の通り便利な道具のことで、とめぽさんの魔法研究と科学力の髄を集めて作り出した科学と非科学の融合体である。僕は何度か世話になっている。
「これだ」

出してくれたのは、鞭。
「これは、電気がビリビリッて流れたりするんですか？」
「いや、ただの鞭だ。こないだ見たアドベンチャー映画の主役が使っていてな、面白そうだと作ってみたんだ」
ああ、その映画は恐らくイン〇ィジョーンズなんだろうな。古風な焦げ茶色の革製の紐。素人には扱いきれないよ……。
「もっとマシなのはないんですか？」
つい不満が口をついてしまった。
「ま、マシなものとは……これだって結構役に立つ……」
とめぽさんセリフ中断。
僕は今、どんな顔をしているんだろう。きっと、縄張り意識の強い象さんバッタの群に入っていくってのに素人に使えない武器を手渡されそうになって半ギレどころかマジギレ寸前の顔をしているんだろうな。
とめぽさんは僕から視線を反らし、リュックをあさる。
「なら、これを使うといい」
出てきましたるは、巨大ハエたたき。
「ほ、ほら、古より、虫にはこの武器だろう？」
……へえ。
ぷっつん。
「ま、まった、リョータ！？　わ、私が悪かった、謝る！　こんどこそ、こんどこそ本当に役立つものを出すから、その鞭を床に置け、な？」
残念、今ならこいつをうまく使える気がしたんだけど。
仕方なくとめぽさんに最後のチャンスを与える。もしまともなものが出てこなかったら、アッチ系の趣味に目覚めさせてあげるつもりだ。
「ほら、名刀『カマキリ』だ」
出てきましたるは、一本の刀。受け取って鞘から抜き取ってみる。不思議と軽い。

「そいつはチョーク一本分の質量から作り上げた、超軽量の刀だ。丈夫さは魔法の折り紙付だ」
うん、これならいけるかも。でも……。
「これ、銃刀法違反じゃ……」
「いいか、違反なんてバレなきゃいいのだよ」
悪い大人もいるもんだ。まあ、この知識が悪用されないだけマシか。
そんなこと実際どうでもよく、今の僕の当面の問題は、あいつらにしたらつまようじみたいな刀で、果たして勝てるのかということだ。
いや、実際勝てなくても杖さえ取れればそれでいいのだけれども。
「さて、行きますか」
刀を片手に構え、庭に一歩。一斉に反応するバッタ達。その数、言うだけ野暮。
「やることは一つ。強行突破だ！！」
一気にダッシュ。行く手をさえぎる、ものすっごい迫力の牙。がちんがちんいってるよ。
「……あら、きりぎりすだったのですか」
ほほほほほー、と後退り。死ぬ。普通に死ぬよこの状況。喰い殺される！！
そんなこんなで死闘を繰り広げているわけですが、とめぽさん……。僕が血塗れになっているのをおかずにビールですか。おいしそうですね、後で貰い受けましょう。
それどころじゃねぇっ！？　死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬよ死ぬ！　杖まであと少しなのに、牙がガチガチ噛み付いてくるよ！　当たったらチョン切られるよ？！
「でーいやけくそだっ！！」
今考えたら、なんでとめぽさんの家で命の危機に瀕してるんだ、僕。

杖をキャッチ、刀で死力を尽くしてバッタの眼を切り付け、ダッシュ、ジャンプ、ローリングを駆使してベランダに戻る。
到着の際にサッシに額をぶつけて非常に痛いイタイ。地面を額を押さえて転げまわる僕を尻目に、とめぽさんは魔法を使った。それもわざわざ火の魔法。
燃えましたとも。ええ、燃えましたよ。バッタは比較的体内の水分が少ないため、パキパキ音を立てて燃えましたよ。そして、僕の着用している、水分と言えば僕から出た汗しかない服も。
「あっつぁぁいいいいい！！」
これが軽い火傷で済んだのも。
「よし、これで大丈夫だ」
とめぽさんの早い応急措置のおかげ。でも、僕が火傷したのは、とめぽさんの魔法のおかげ。
「……選ばせてあげますよ。この鞭で新しい快感に目覚めるか、このハエたたきで虫けらのように叩き潰されるか」
僕は慈悲深い。なにせ選ばせてあげるんだから、うん。しかも片方には快感も織り交ぜて……ふっふっふっふっふ……。
「ま、まま待て、落ち着けリョータ！　話せばわかる、冷静になるんだ！！　そうだ、茶を煎れよう。それで少し落ち着こう。な？　美味い茶菓子もあるぞ？！」
生憎、物で釣られるほど今の僕は純粋ではありませんよ。そうさせたのはとめぽさん、あなたですしね。
「わ、わかった！！　地下倉庫にある日本酒をやる！　それでなんとか、な？」
日本酒？　……まあ、いいでしょう。今日の騒動を収めた謝礼としていただきましょう。
「ふぅ……じゃ、とってくるでの、湯飲みは自分で用意しておけ」
そう言って、逃げるように奥にいくとめぽさん。あ、そういえば今日、珍しく僕が立場上だったな。なんか、普段からたまってた不満が一気に解消されたような気がする。

……気になる。なんであんな大きなバッタが庭に居たんだろう？
絶対、とめぽさんはなにか狙っていた。とめぽさんがああいう非現実生物を連れ込んだり作り出したりする場合、何かしらの狙いがあってのことだから。前の巨大鶏は大きな卵焼きを食べたかったからだったし。僕が大量に作ってあげたな。
……聞いてみるか、直球で。
「ほれ、滅多にお目にかからん代物だ」
持ってきたビンのボトルには、地獄堕しと印があった。いやな名前だ。
「いただきます」
聞くのはやめた。美味い酒のつまみになるような話にはならないだろうから。
たまにはこういうのもいいかも。
「……とめぽさん」
「なんだ？」
「虫、嫌いなんですね」
僕の一言にむせるとめぽさん。
「げほっ！　なにを、ばかなっけほ！」
わかりやすい人だ、本当に。こんな人だから、憎むに憎めず、いまだに弟子をしてるのかも。
まあ、教えてもらう魔法は結構便利だし。

そのに！（後書き）

リョータ君、銃刀法違反とか言ってたくせに、自分は飲酒ですか。
中二のくせに……。

僕ととめぽさんとミミズともぐら帝国　そのいち！

はい、リョータです。僕は只今、とめぽさんの研究を手伝っている。

僕がやることは、コッペパンを食べながら、実験動物をビーカーやケースに放り込むこと。それにとめぽさんが薬やら新種の魔法やらをかけるという、なんとも単純な作業。

僕がいなくても成り立つ作業。なぜ僕がいるのかというと。

「喉が渇いたな。茶を入れろ」

「はい」

このために僕はいる。研究室の隣は台所なので、お茶を煎れるのは時間がかからない。とめぽさんのお気に入りのお茶を煎れ、湯飲みを運ぶ。

「はい、どうぞ」

「うむ」

お茶を受け取りすするとめぽさん。僕はコッペパンを食べるのを再開した。

パンは、好きだ。唾液を持っていかれるけど、噛めば噛むほど、パン特有の風味や甘味が口の中に広がってくる。僕はきっと、パンとある程度の野菜があれば生きていける。サンドイッチも好きだし。

僕は幸福に満ちた顔でパンを噛み潰す。磨り潰す。

「そんなパサパサしてて味気がなく、なおかつ口内の水分を根こそぎ奪っていくものをよくも飽きずに食べていられるな」

とめぽさんはご飯派のようで。そういう人には、このパンの感触、噛み応え、唾液を奪われる感覚、それらを楽しむという概念がすでに存在しないんだろうな。

「僕は好きなんですよ」

そう言いつつ、新しいコッペパンを取り出す。

とは言ったものの、やっぱりなにも付いてないのをいつまでも食

べ続けると、飽きてくる。おいしいのだが。
無駄かもしれないが、聞いてみよう。
「あのー、ジャムってありますか？」
「ああ、台所の戸棚の下に入ってるぞ」
あるんだ、意外だ。とめぽさんもたまにはパンを食べるのかな？
「少しもらってもいいですか？」
「なんだ、やっぱり飽きてたのか。あんな乾燥した炭水化物の塊、そのままでおいしいわけがあるまい」
……ムカつく。いや、おいしいよ。さすがに連続で食べ続けるのに限度を感じただけだよ。なのにそんな言い方しなくてもいいじゃないか。
漠然とした怒りを自分勝手にも感じつつ、再び台所へ。
戸棚戸棚、と。……あった、けど……これをジャムと呼んでいいのだろうか？
「あのー、とめぽさん、僕は『ジャム』の在処を聞いたんですけど？」
「おまえの手に持ってるそれが『じゃむ』だが？」
この、鮮やかな虹色に輝く流動体がジャムだなんて、僕は信じない。
「明らかに何らかの魔法薬じゃないですか？！」
断固反論。
「大丈夫。味を中心に調合したものだからの。副作用の疑いはあるが」
最後の言葉は聞き逃せない。いや、逃したら最後、ヤバい目にあうのは僕だ。
薬害断固根絶。
「普通のジャムはないんですか？　たとえばイチゴとか」
「フッ、必要ない。そのじゃむは食す本人の思考に合わせ、本人の食べたい味に変化するのだ」
誇らしげに胸を張りますが、ジャムの発音が変でしたよとめぽさ

ん。あんた、ジャムのことよく知らないうちにこれ作ったんだろ。
「……とめぽさん」
「なんだ？」
「僕にもしものことがあったら、あなたもこれを口にしてくださいね」
「……」
無言で眼逸らしやがった。十中八九、何かある。よし、やってやろうじゃないか。
……何故だろう。食べなくてもいいのに食べようとしちゃうのは。
「これ臭いよ」と言われてるにもかかわらずに匂いを嗅いでしまう小学生の心理に近いのかもしれない。
「……」
生唾を飲み込み、ビンの蓋に手を掛ける。左回転。パクッと音がして、手応えがなくなった。回せば、開く。とめぽさんも緊張の面持ち。
あなたにそんな顔されると、恐怖倍増なんですが……。つまりはこれ、とめぽさんでもどうなるかわからないってことだろ。
まあ、そんなこと思いつつ、ついに蓋は取れた。
「……？」
あれ？　なんか、気泡が浮いてきたんですけど……。
《パァン！》
軽い炸裂音に継ぎ、中身の半分があたりに飛び散る。眺めていた僕ととめぽさんは直撃。虹色にベタベタ。
「……ベルタールの量がすこし多かったか」
……失敗作かい！！　あーあ、この服、まだ新しいの、に……？
「あ、あれ？」
世界が回ってるような……まーわーるーまーわーるー……。
途切れた意識を回復させると、なにやら研究室とは別の空間にい

るようだ。とめぽさんに運ばれたのかな？
　それにしても、無駄に広い空間だな。明らかに東京ドームの五倍以上ありそうだよ。確かにとめぽさんには、狭い空間を無理矢理広げる魔法があるよ（それで、外見的には普通の広さの庭に像みたいなデカイバッタが何匹も入っても大丈夫な広さを作り出してるわけだけど）。それにしたって広すぎだろ、これは。
　ぐるっと見回して、足元に何かあるのに気が付いた。薄水色のワンピースに肩に届くかくらいの髪の毛。あ、とめぽさんだ。
「とめぽさん、起きてください」
　でも、とめぽさんはなんでこんな近くで寝てたんだろう？
「う、ん……」
　面倒くさそうなうめき声をあげ、軽くあくびをし、目を擦って僕をみる。
「……どこだここは？」
「……はい？」
　それはこっちが聞きたかったセリフなのだけれども、それをとめぽさんが口にしたってことは、僕らは何らかの外部干渉によってここに運ばれたらしい。
　困ったな。どうやって帰ろ……。
　辺りを見回したら、見覚えのあるおいしそうな茶色い物体C。
「……コッペパン」
　ありえないが、それしかない。それにしてもなんだ、この大きさは。
「……小さくなったのか、私たちが」
　とめぽさんはいつも冷静。例えば僕の右手が通常の五倍近くに一瞬で膨らんでもまったく慌てない。当事者の僕は物凄く慌てたわけだが。
　とにかく、とめぽさんの言ったことは正しいみたいだ。よくよく見れば、薬品をかけられて体が蒸発したバッタや、中に蜘蛛やカマキリ等の肉片をこびり付かせたビーカーなどがあった。

ああ、昆虫の視点ってこんなもんなのかな？
「とりあえず、どうします？」
「うむ」
困った時のとめぽさん頼み。なんだかんだ言ってもやっぱり一番頼りになるのはとめぽさん……。
「そのうち戻るだろうな」
なんてアバウトな！？
「そのうちって、どのくらいですか？」
「そうだな……三日間、くらいだな、おそらく」
三日間もこのままなのか……。それは困る！
「なんとかなりませんか？」
「まあ、解毒薬を調合して服用すればすぐに戻るだろうが、この大きさではな……」
確かに。小さじですらとめぽさんの首辺りまでの大きさだ。ビーカーは、水を張ったら溺れられるくらいだろう。
……レッツスモールライフ。
「……あの」
ん？
「とめぽさん、何か言いました？」
「？　私ではないぞ」
気になった僕ととめぽさんはあたりをキョロキョロ。
「あの、こっちです」
後ろか。振り返ると……。
「……」
「……」
目が合った。いや、正確には合ってない。だって、目が無いもん。
声をかけてきたのはミミズでした。土を良くする田んぼのお友達で、鳥などの餌になるミミズです。
そういや、家の庭にいたやつを連れてきたんだった。イソメにしなくてよかった……。

どうやらとめぽさんはミミズさんが怖い様子。僕の後ろに何気に隠れた。
「で、なんですか？」
ミミズさんは目的があって声をかけてきたはず。聞いてみた。
ミミズさんがしゃべっても驚かないのは、前にしゃべるエリマキトカゲやアオダイショウなどを目の当たりにしたから。とめぽさん、もっとまともなやつにしゃべらせましょうよ。犬とか猫とか。
「あの……わたしたちを助けてください」
……いきなりのヘルプコール。これは一体なんの王道ファンタジー漫画ですかね？
「あの、無理です、すみません」
そう、僕は別に特殊な力を持ってるわけでも、高位魔族の落とし子ってわけでもないから。
「そんな！　あなた達しか頼る人がいないんです！　お願いします！」
本当には全くその気は無いんだろうけど、まわりでとぐろをまかれると、ヘビに逃げ場を塞がれたような感じになってる。しかも、とめぽさんには効果覿面。一見平静そうですが、生半可に弟子をしていない僕にはわかる。とめぽさんは今、失神寸前だ。そこまで嫌いですか、ミミズさんが。
「おいリョータ、こいつの頼みを聞いてやれ。いや、聞いてやってくれ」
あー、仕方ないですねー。今回は角野月で手を打ちましょう。
「な、なに？！　なぜそれを知っている！？　それは……ダメだ、私の楽しみで……」
なら、いいんですよ。パタリとあなたが倒れるまでこの状況で。
「ぐぅ……わかった」
「よし。ミミズさん、助けて差し上げましょう」
「ほ、本当ですか？！　ありがとうございます！！」
近寄って頭を下げるミミズさん。結局、とめぽさんは目を見開い

たままぶっ倒れたのでした。でも、約束したんですから角野月はもらいますよ？

「私たちは、とても平和に暮らしていました」
寝息を立てるとめぽさんの頭を膝に乗せながら、ミミズさん（名前はシー・ログログ。ミミズ関係ねぇー！）の身の上話を聞く。
うなされているとめぽさんはきっと、巨大ミミズに追い掛けられてるんでしょう。手足が時々ビクンと動いて、当たって痛い。
「ところが、そんな平和な時は突如崩れ去ったのです！」
一時間ほど続いたミミズ族の歴史が終わり、本題に入った。途中とめぽさんは三度目覚めたけど、目の前でミミズ族の歴史を話しているシーさんの顔？　を見て、再び巨大ミミズに追い掛けられる夢に突入したのでした。……シーさんには少し距離を置いてもらおう。
「しかし、その危機は勇者ライト・ライによって救われ、再び平和が訪れました。そして……」
本題じゃなかったんかい！　長ったらしい！
「……あのー、本題に入っていただけませんか？　じゃないと、あなたにさっきのナメクジと同じ末路を辿らせますよ？」
しまった、普段の癖でドスの効いた鉛色の声になってしまった。
シーさんはあの目の前で数倍に膨張して、生きたまま臓器を吐き出しながら体のあちこちがブチブチ千切れていったナメクジを思い出し、ガタガタと震えながら「ごめんなさいごめんなさい」と何度も謝っている。
こっちこそごめんなさい。
「では、手短にお話しますね」
そうして、シーさんはやっと話し始めたのでした。
彙によると、シーさんの国――正確には僕ん家の庭――が、もぐら帝国とやらに襲撃をうけ、みみず国のみみずさん達は奴隷になったらしい。ようするに、僕にそのもぐら達を追い払ってほしい、と。

あ、僕は味方にしかさん付けないよ。
「うむ、そうか」
シーさんが距離を置いてくれたため、とめぽさんは冷や汗をかきつつも起き上がった。
「それではリョータ、行ってこい」
……はい？
「とめぽさん、あなたも行くんですよ？」
「な、なな、何？！　私は行かんぞ！？　なぜこの気味の悪い表面に妙な光沢を帯びた生肉のような薄気味悪い色の軟体生物がうじゃうじゃ蠢いてる恐怖と混乱の坩堝へ自分から出向いてやらなきゃならんのだ！？」
そこまで言いますか。シーさんもショックを受けてるようで。まあ、ここまで一息で拒絶されれば誰でもショックか。
「いいですか？　あなたがいなきゃ僕は、この机を降りることも、家からでることも、自分の家の庭に行くこともできないんですよ？」
悲しいけどこれ、現実なのよね……。あ、ちょっとパクりました。
「むぅ……しかし……。わかった、行こう。言い出しっぺは私だしな」
こういう時は潔く覚悟を決めるとめぽさん。こういう人だから、僕は弟子をやめなかった。とめぽさんの人徳ってやつか。変人ではあるけど。
こうして斯くして、僕ととめぽさんはみみず国を救いにいくことになりました。

そのに！

ええ、リョータです。僕は今、自分ん家に向かって歩いてるんだけども、遠い。元の大きさなら、たったの十歩くらいの距離なんだけどなぁ……小さいと非常に遠い。

今の僕たちの身長はだいたい十センチくらいだと思われる。僕の歩幅は約五センチくらい。大股で歩いてこれだ。隣の家がこんなに遠いものだとは思わなかった。

そうこう考えてる間に、門の前に着いた。元なら玄関まで三歩くらいのこの距離。今じゃ約四十歩くらいかな？

なんか小さいってのは大変だけども、いろいろおもしろいな。

「庭はこっから左に向かったところです」

僕が率先する。僕ん家だから。

庭に向かう途中、アリに出会った。普段なら豆粒程度の大きさだが、今は靴くらいの大きさはある。やっぱりまだ小さめ。

結構な距離を歩き、ついに僕の家の庭に到着。小さいと、見慣れた庭も違う世界に見える。

「気を付けてください、もうすでに奴らの領地です」

もぐら共、人ん家の庭を勝手に自分の領土にしてんのか。身の程知らずが。

「……滅殺」

突然の呟きに驚くシーさんととめぽさんを余所に、とめぽさんより譲り受けた魔法金属製の細剣を抜き放ち、モグラ塚を探す。

まあ、簡単に見つかるだろう。という考えは甘かった。

「見つからないなら、向こうから出てくるのを待てばよい」

半殺人鬼状態だと自分でもわかる僕に、とめぽさんは鎮めるように一言。

でも、待ってるだけじゃ来ませんよ？

「そのための餌があるだろう」

ああ、確かに。
「え？　え？」
これから自分の身に何が起ころうとしているのかわからないシーさん。視線が僕ととめぽさんの顔を往復する。

「やーめーてー！　ほどいてー！　イヤー！！」
精神的に女性であるのか、シーさんは甲高い叫びをあげて解放要請。僕の個人的意見で却下。
S？　よく言われるけど？
草陰に隠れて観察。シーさんは声枯らすことなく叫び続ける。少し酷い気もするが、仕方ないと割り切る。いや、なんかうねうね動くのが面白い。昔見た、音をならすとうねうね動く花のオモチャみたいだ。
自分でも自覚できるほどのSだな。
「へっへっへ、美味しそうな叫びが聞こえるな」
地面から唐突に声が聞こえたと思ったら、シーさんが静かになった。
地面がボコッと動いたかと思うと、ズルズルとシーさんが地面に沈む。再び叫びだすシーさんだったが、抵抗虚しく地面へと消えた。
僕らはそっとシーさんのいた地点に移動。地面には、隠ぺいされてはいるが、穴が開いた痕跡が残っていた。
「とめぽさん、地面に穴を開ける道具はありますか？」
「これを使うといい」
……ハンドスコップ？
「……軽い冗談だ、そう睨むな。ほら」
杖、ですか。
「アース系統の魔法を使えば穴の一つや二つ、簡単だろう」
確かに。ではさっそく。
弟子になった次の日から、教え込まれた魔法。初期呪文はあらか

た使えるようにはなっている。僕は最近、アクア系統を専攻している。

「……はっ！」

杖で地面を軽く一突き。多少の地鳴りがして、穴が開く。今のはアース系統の魔法の初期呪文、アースストライク。地面を揺らすだけの魔法。今は元々から下が空洞だから、揺らすだけで開いたけど、きちんとした穴開け用の呪文もある。

その辺の草の先を穴に垂らし、それを伝って下に降りる。モグラの巣へあっさり侵入。

……穴、土の。そのはず。そう、モグラの巣に来たはず。間違ったって、こんな近未来的な全面鉄製の通路なんかに出るはずが……。これじゃあまるでＳＦ世界だ。

「とめぽさん、最近のモグラはこんなに科学力があったのでしょうか？」

「愚問につきマイナス一点。あるわけなかろう」

なんのポイントがマイナスされたのかはさておき、この状況はいったい……。

「まさか、奴か？」

とめぽさんがなんかブツブツと独り言を始める。とりあえずフリーなその左手を――右手は顎に添えられている。とめぽさんの思考全開モードのスタイル――掴み、引っ張っていく。こうでもしないと、この状態のとめぽさんは動いてくれない。

スタスタとシーさんのいるところに向かって歩く。とめぽさんは今だに思考モード。

なぜまっすぐにシーさんのところへ行けるのかというと、アクア系統の中級魔法、アクアサーチの呪文を口ずさんでいるから。これは、自分の体液を付着させた物体の位置を察知できる優れ物。

シーさんには縛る時に僕の汗を付けておいた。僕もベットリになったわけだけども。

っと、そんなこと話してる間にシーさんが捕まっていると思わし

き部屋の前に到着。呪文を唱え続けるのは相当疲れるから、わかればすぐに詠唱終了。
「……どうやって開けるかな？」
一、力に任せて吹き飛ばす。
二、開け方を探る。
三、とめぽさんが嫌がるだろうから、ここを素通り。
ふむ、一はあまり好きじゃない。僕はアクション派じゃないし。三は無視。
じゃあ、開け方でもボチボチ探しますか。
「……なんだ貴様はぁ？！」
……アクアハンマー！！
すべてを水に流しましょう。地底人のような二足歩行型モグラがビームガンらしき楕円形の物体を手に持っていたなんて……。しかも、二人組で巡回してくるとは。
ああ、なんか似てる。とめぽさんの創りだす生物に……。
「とめぽさん！」
「一刻を争うかもしれん、モグラの大将を探すぞ！」
珍しい。とめぽさんが声を荒げるなんて……。よっぽどマズい状況なのか。
「わかりました」
仕方ない、一でいくか。アクアハンマー！！
《バゴン！》
と盛大な音を立てて弾けとぶ扉。中を見ると、シーさんが扉の直撃を受けて気を失っていた。
あ、扉から離れてくださいって言うの忘れてた。
「……行きましょうか」
僕は自分のイメージを守るために、そこから逃げ出した。そうすればあの扉の件はモグラのせいになるはずだから。
自己中心的、と言えばおしまい。
「とめぽさん、モグラの大将はどこにいるんですか？」

それがわからないことには始まらない。
「知らん。しらみつぶしに探すぞ」
あてもなく探すのか……面倒な。第一広そうな穴の中でたった一匹のモグラを探すなんて。
それにしても、モグラが二人組で見回りにくるなんてどういうことだ？　モグラは確か、縄張り意識の強い生物だったはず。一つの巣の中に二匹は住まないって聞いたことがある。日光に当たったら死ぬって話もなかったっけか？　でもそれだと泳ぎが得意だって話と矛盾するな。
って、モグラのことを深く考えてる場合じゃない！
「いたぞ、侵入者だ！」
手に持ったハンドガンらしきものから弾を発射しながら距離を詰めてくるモグラ兵。鉄製っぽい壁や床に少し深めに弾痕がついてるから、当たったら痛いって次元じゃないことがわかる。
この歳でまだ死にたくはない。中学二年生男子、自宅の庭の地下にて射殺される。わけわかんないしシャレにならん！
となれば手段は一つ。
アクアピアス！
「なん……ぎゃあぁぁぁぁ！？」
モグラの断末魔。すまない、殺られる前に殺れってことなんだ。憎しみだけで殺したわけじゃない。いや、憎しみの気持ちも多々あるわけだけども。
とにかく、とめぽさんに指示された通り、モグラの大将を探す。モグラ帝国だから、モグラ皇帝かな？
「とめぽさん、行きまし……」
あー。はぐれた。

そのさん！

「ぷぎゃあ！？」

いきなり断末魔から始まってすいません。だって今、大変なんですもの。

敵は二人一組で襲い掛かってくる。武器はハンドガンやマシンガンなど、とにかく銃。当たったら死ぬってのはどれも変わらなそう。

こちらと体力も限界に近い。魔法を使用する度に僕の疲労は溜まっていく。つまり連続使用すると、マラソンをしているのと同じだ。

僕はマラソンは得意じゃない。

「はぁ、はぁ……っはぁ」

疲れた。力が入らない。水が欲しい。魔法で出す水は質量保存の法則の問題で、この世に存在できる時間は二十秒だけ。飲んでも体内で消滅する。

「とにかく、とめぽさんかモグラの大将を探さないと」

しかし、入り組んで入り組んで……。マラソンも苦手だけども、迷路も苦手な僕。

「……ここ、さっき通った」

しかも三回も。ダメだ、完全に迷った。

ああ、なにかいい目印になるものはないかな……。

「……」

もう、疲れた……。とめぽさんについていくと、いっつもこんな危ない橋を渡ることになる。昔からよく頑張ったな自分。

だから、そろそろいいんじゃないかな？　そろそろ、自分の命を考えて、一つしかないし。

「……次、あったら」

そう、次にあったら、僕は……弟子をやめる。もう、たくさんだ、こんなこと。もう――

僕はいつの間にか眠ってしまったらしい。そこで夢をみた。
僕は空を飛んでいて、左手にはなぜかカタツムリが。なんで？
するととめぽさんが目の前に立っていて、僕もいつの間にか地面に立っていて。ここはとめぽさんの部屋の家の中。
その時僕は、なぜか、不思議と……安心していた。きっとそのうち、僕に危ない命令でもするんだろうと思っていたけど、安心していた。
とめぽさんが、笑っていたから――

「リョータ、起きろ」
誰かに呼ばれて、僕は目を覚ます。冷たい床がいやに心地よかったから、離れるのがすこしダルい。
声の主は、とめぽさんだった。この場所はどうやら、牢屋らしい。眠ってる間に連れてこられたのか。
「とめぽさん、いったいどこに行ってたんですか」
「いや、おまえが勝手に行ったのだろう」
意見が食い違った。
長い話し合いの末、僕が悪いという結論に至って、話を進める。
「ふぅ、まあ、いいです。あの、とめぽさん……」
「ん？」
……あの話は、ここを無事に抜けてからにしよう。それより今は、もぐら達のことを聞いておこう。
「あのもぐら達はいったい何なんですか？」
「あいつらは、『ふらば』という男が作った実験生物だ。そいつは、動物たちに薬品や魔法などを服用して改造し、それを野や町に放って実験データを採集している非道なやつだ。たとえば――――……
……」
要するに、とめぽさんの同業者の方ですか。僕の頭に、ビーカー

片手に高笑いする悪の科学者的なイメージが浮かんだ。
話を聞いていくと、そいつの目的が世界征服だと言うことを知らされた。やっぱり狙えるのか、世界。
「――――……そして私は、やつの暴走を止めるべくして、こうして密かにやつへの対抗手段を練っていたのだ」
なるほど。だから見た目危険で、本当に危険な生物の生産をしていたわけか。
で、そいつらが言うことを聞いてくれないから、仕方なく僕に処分を任せていたと。
今まで弟子をやっていたのに、まったく聞いてなかった話。いや、聞かなかっただけなんだけども。しかも話を聞いてるうちに、僕は弟子じゃなく兵士なんじゃないかなとか思えてくる。
「そんなに壮大なことをしてたのか」
外聞は壮大だが、やることは小さい。だって相手の兵士はもぐらだし、侵略地は僕ん家の庭だし。
「……誰か来た」
僕は人の、いやもぐらの気配を感じ取り、牢屋の外を見る。
「皇帝陛下がお呼びだ。おとなしくしていろよ？」
牢屋の入り口を開け、僕ととめぽさんの手を後ろで縛り上げ、連れ出すもぐら達。
皇帝陛下か。だから帝国なのか。などと呑気な考えなんてしてる場合じゃなかった。いったい、どうなるんだ？

「皇帝陛下、捕虜を連れてまいりました」
深々と頭を下げるもぐら。その先には、ゴージャスな飾り付けの大きな椅子に座っている一回り大きなもぐらがいる。あれが親玉か。
「ようこそ、とめぽ女史」
寛大な動きで、表面上は敬っているように見せるもぐらの大将。だけど、その腐った目は歓迎している様子は伝えていない。

ちなみに、僕のことは知らないらしく、無視しているようだ。
「ほう、私はもぐら界にまで名が広まっているのか、光栄だな」
とめぽさんはにこやかに語るが、目は笑っていない。むしろ怒りを発している。
怖い……。
「とめぽ女史、あなたに伝言があるのですが……」
もぐらの大将が言うと、とめぽさんは至極不機嫌な顔をした。どうやら内容はわかっているご様子。
「何度問われても返答は一緒だ。そう言っておけ」
私も舐められたものだ。最後に小さく毒づいた。
もぐらの大将は軽くため息を吐き、僕らを牢へ戻すよう、部下に命じた。僕らは再び牢屋に放り込まれた。
「さて、どうしましょうか」
僕としては、とっとと脱走してあのもぐらの大将をぶちのめしたいところ。
こういうときは、とめぽさんの不思議グッズを使用するのが一番効率的。
「私に聞くな。あのリュックと杖がなければ、私はただのか弱い少女だ」
……。開いた口が閉じません。実際に。
「なんだその顔は？　不満か？」
「いやいや、滅相もない……」
ただのか弱い少女って……。か弱くはないし、少女でもないよ！
まあ、日本国では言論の自由が保証されてますがね。
「私はまだピチピチの十七歳だ」
なんて大胆なサバ読み！
「年のことはいいですから、これからどうするかを考えましょうよ」
そう、まずはここから出る方法を……。
「あ、やっとみつけました！」
おお！　敵にとっての思わぬ伏兵が！

その長い胴体でどうやって見つからずにここまできたのかはわからないが、牢屋の外にはシーさんがいた。
「シーさん！　ここから出してもらえたら助かるんですが。てか、なんとかして出してください」
とりあえず要求。
「待っててください！」
頼りにされたのがうれしかったのか、シーさんはうねりうねりと喜びを露にした。とめぽさんは部屋の隅で壁と対談しているようだ。
シーさんはひとしきり踊ると、三回ほど首をひねった。
「……どうしましょう？」
ああ、開け方がわからないのか。てっきり僕のことを忘れたのかと思った。
あれこれと考えをめぐらせたシーさんは、ある結論に至った。
「せーの……えいっ！」
《ガシャン！》
体当たりは、牢には通じないと思うのは、僕だけだろうか？　その程度の強度なら、僕らは今ごろもぐらの大将の前だな。
「いったぁい……」
当然だ。馬鹿かあんたは。いや、馬鹿なんだろうな。
痛みにもがくシーさん。そして僕は、シーさんの体に付着した楕円形の物体を見つけた。
あれは！
「シーさんストップ！」
僕に言われて、シーさんは変なオブジェと化した。辛そうな体勢だ。
「そのまま僕のほうに寄ってきてください」
シーさんは僕に言われるがままに、バランスをとりつつ、体勢維持のために震えながら器用に近寄ってくる。
人間で例えるのなら、片手で背面ブリッジをしながら横に移動するようなものかな？　たぶん。

「あ、の……はや、く……」
僕はシーさんの体に手を伸ばす。楕円形の物体はやはり、もぐら達が持っていた銃だった。
この人、僕の暴れながら通過した道を来たのか。体のあちこちにもぐらの毛や血、肉片などが付着している。
「よし、取った！」
銃をしっかりと手に持ち、使い方を考える。たぶん、引き金を引けば……。
……。
「……！？」
引いちゃった！？　どうやら無音機構のようで、軽く空気が抜ける音がしたあと、シーさんの体に付いた縦筋の傷から血が流れ出る。
「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい！　ど、どどっど、どうか命だけはご勘弁をー！！」
いやぁ、非常に申し訳ない。
隅で丸くとぐろを巻いて謝るシーさんを尻目に、僕は牢屋の鍵を銃で破壊した。それにしても、見張りがこないな。うん、都合はいいが不思議だ。
見張りの詰所に来てみて、謎は解けた。
「ぐごぉぉ……ぐがぁぁ……」
職務怠慢甚だしい。机に足を投げ出して、椅子に目一杯寄りかかり、大口あけて寝ている。僕はこういう不真面目にも程があるやつは、死んでもいいと思っている。
銃口を静かに頭に付ける。
「さよーなら」
ぱすっと見張りもぐらは、夢から天国に向かって直行便に乗り込んだのでした。とめぽさんとシーさんがなにやら青ざめた顔で僕を見てくるが、気にしない。
見事に杖とリュックを取り返し、とめぽさんはフルアーマー形態

に。いや、ただリュックを背負って杖を持っただけだけども。
あ、一つ関係ないこと言わせてもらいます。もぐらを殺すの、けっこう嫌な感じなんですよね。あいつら人間みたいな形していますし。まあ、慣れはしましたが。
殺人鬼って、こうして生まれていくんですね。
そんなことよりも、早いとこもぐらの大将のところへ。
「ちょっと待て、リョータ」
出発しようとする僕を、とめぽさんは声で制止した。何事かと振り返ると、とめぽさんはシーさんから距離をとり、なにやら呪文を唱えている。
とめぽさんの呪文の詠唱が終わり、杖を一振りすると、シーさんが、軽い炸裂音と共に煙に隠れた。
「けほっげっほ！」
煙は予想以上に広がり、部屋全体を包み込んだ。僕もとめぽさんもシーさんも、むせるむせる。やがて煙が収まり、僕は咳き込みながらもシーさんの姿を確認した。
さっき使っていたのは、擬人化の魔法というやつだ。この魔法は、とめぽさんが猫やモンスター等の擬人化イラストに大変興味を持ち、自分でも描いてみようと悪戦苦闘したが、画力が小学生レベルだったために断念し、代わりに作ったものだ。
ようするに、萌えを優先した非戦闘型の魔法。
煙の中から現れたシーさんの姿を見て、僕は一言。
「か、可愛い……」
流れるようなウェーブのかかった滑らかな茶髪。痩せすぎず、太すぎずのほどよい体型。元気っ子に見られる大きく見開かれた目。小さめの鼻。服はみみず色でありながらも、気持ち悪さを感じさせないフリフリのついたワンピース。
ワンピースってあたりが、とめぽさんらしいや。
「いつまでもみみずの格好では目立つしな。こっちのほうが私も接しやすい」

なるほど、みみずでなければとめぽさんも大丈夫か。
シーさんは体の異変に気付き、ワンピースや顔、手足をさわって確かめる。そして何気なく裾をたくし上げ……！！
「と、とにかく、出発しましょう！」
くまさん……じゃなくて、もぐらの大将のところへいざ出発！
とめぽさんが嫌味な笑みを浮かべて見てくるが無視無視！
いざ行かん、もぐらの大将のところへ。

そのよん！

僕たちの快進撃は、目を見張るものだった。先導はとめぽさん。道筋を記憶していたらしく、迷うことなく奥へと進んでいく。その道中の障害生物は全部僕が苦情する。

とめぽさん秘伝の剣と奪った銃で闘う。まるでゲームやマンガの主人公みたいな気分に浸りつつ、殺人ならぬ殺もぐらを平然とやってのけるあたり、僕は精神的に病んでいるのかもしれない。

今度、父さんに精神病院に連れていってもらおう。

「リョータ、少し休憩するぞ」

とめぽさんが急に言い出した。休憩所はすぐ近くの扉。

「いえ、僕はまだやれますよ」

いや、嘘だけどね。手が痺れるし膝が笑うし、でも口元の嘲笑が止まらない。　ああ、殺人鬼ここに誕生。

「お前はどうでもいい。私が疲れた。行きたければ勝手に行くといい」

自己中な！　まあいいや、僕も休もう。

休憩所内は快適だった。完全防音、冷暖房完備。地下と思わせないためか、壁には風景を映し出すモニターが設置されていて、さわやかな草原が広がっている。

他にも、冷蔵庫、解凍用のレンジ、システムキッチン、ジュークボックス等。とにかく、三ツ星の休憩所。

「リョータ、茶を煎れろ」

とめぽさん持参の湯飲みとお茶の葉を渡される。僕の分も持ってきてくれるほど優しい人ではなかった。仕方なく、その辺の食器棚の湯飲みを借りる。

きゅうすに茶葉を入れ、湯を注ぐ。熱すぎると香りが飛ぶため、少しぬるめのお湯だ。しっかりとお湯を浸透させ、湯飲みに注ぐ。

その際も、静かに注ぐ。濃度を均一化するために、三つの湯飲みに半分ずつ煎れ、同じ順番でもう一度注ぐ。
まあ、普通にダボダボやっても変わらないだろうけど。
「はい、煎れましたよ」
猫舌なとめぽさんには一段とぬるい、とめぽさん専用の湯飲みを。
僕とシーさんは少し熱めの湯飲みを。
ズズーっと、三人で啜る。和むなぁ……。

「てやぁ！」
悲鳴をあげることすら許さない鋭い斬撃を繰り出しつつ、かっこいいなと自画自賛してみたり。休憩したおかげでまた元気に殺人鬼ができています。
前略、母上様。僕は人の道を外れてしまったかもしれません。ですが、あなた様の所為ではございません。
「そろそろ目的地だ」
ただ単に覚えた道を歩いているだけのとめぽさんと、その後ろをチョロチョロとついて歩くシーさん。僕が彼女らの数倍疲れるのは、僕の気のせいなんです、はい。
「これはこれはとめぽ女史、再び来ていただけると思い、お待ちしておりました」
ふむ、偉そうにふんぞり返るもぐらの大将の近くにあるのは、ロボットか？！　いったいどれだけの科学力を有しているんだこのもぐら達？！
詳しくロボットの見た目を答えると、逆関節二足歩行型で、胴体は戦闘ヘリみたいな感じで、側面にはガトリングらしきものを二門搭載している。うん、完全にゲームやマンガのクオリティ。
「もう一度だけお聞きいたします。我々に助力していただきたい。マスターふらばもそれを強く望んでいます」
もぐらの大将がそう言うと、とめぽさんは嘲笑った。つまりは拒否。

「わかりました。では、あなた方を消すしかありません」
もぐらの大将の指示で、ロボット達は一斉に僕らを狙う。いやぁ、さすがに今回ばかりは死ぬかも。柱の陰に滑り込む。
ロボット達の何体かがこっちに向かってくる。とめぽさんは杖をブワンブワン振り回して大きな魔法の呪文を唱えている。ちょっと当たりそうで怖い。
シーさんはどこで拾ってきたのか、ハンドガンを手に持って臨戦態勢。
僕は突撃態勢。剣は密やかに杖の役割も果たせるため、ウインド系統の魔法を唱えて、自分の行動速度を早めておく。
「……なんか、規模が大きくなってる気がする」
たかだかもぐらの駆除のはずなのに、いつのまにかＳＦチックな戦闘に突入してる。まあいいか。
さて、まずはとめぽさんの魔法の発動から先だな。
「唸れ暴風！　打ち砕け霧雨！　クラッシュストーム！」
うわぁ、上の中くらいの攻撃型魔法じゃないっすか！？
物凄い爆音の後、もぐらの大将一匹を残してロボット軍団は全滅。絶対世界を狙えるよ、これ……。もぐらの大将もびっくり。シーさんも僕もびっくり。
「むう、これほどとは予想外だ」
とめぽさんもびっくり。そんな危ないことしないでくださいよ……。まあ、本来ならあのロボット達との壮絶な戦いがあったはずだけども、それが省かれた。僕としてはうれしい。
「そこのもぐら、覚悟せよ」
とめぽさんが一声放つと、もぐらの大将は椅子に仕掛けてあったスイッチを押した。すると椅子の周りにガラスが出現した。
「くっ、ここまでとは聞いていない！　悪いが退散させてもらいますよ、とめぽ女史。“生きていたら”また会いましょう、フハハハハ！」
逃走フラグを立てて、もぐらの大将の椅子が上へと上っていく。

同時に地震のような揺れが僕らを襲う。
あー、どうやら崩れるみたいだ。……中学二年生男子、自宅の庭にて生き埋め。超怪事件の新聞の見出しが僕の頭を過る。きっと容疑者は家族。しかし真犯人はもぐら。
ああ、この上ない怪事件。
「なんてのんびり構えてる場合じゃなかった！」
魔法剣を振り回して落石を防ぐ。とりあえず脱出方法を探る。
「とめぽさん、上に逃げられませんか？！」
「やろうと思えばできるが……リョータ、自宅の庭で生き埋めになるのと自宅の庭で圧死する、どちらがいい？」
要はどちらにせよ死ぬってことですか。
ああ、未練たらたらで短いし大してよくもない僕の人生が終わるのか。こんなことなら、ちゃんと洗濯物取り込んでおけばよかった……。
天井が限界に達したようで、底のトゲをパキッと折ったときのプリンのように、ドカッと降ってくる。やけにスローモーションに感じる。うーん、死ぬ……。
と、思ったのさ。死んだと思ったよ。目瞑ったら頭ぶつけて、潰されるのかと思ったら、そのまま天井を弾き返しちゃったさ。いやー、しつこいけど死んだと思ったよ。
恐る恐る目を開くと、ちょっと大きめの穴に足を突っ込んでいる自分がいて、隣にはとめぽさんとシーさんが土を被って立っていた。何が起きたのかわからず立っていると、とめぽさんが呟いた。
「……戻ったようだな、大きさが」
ああ、なるほど。それで助かったのか。よかったよか……って！？
「なんでシーさんまで？！」
だってシーさんはみみずだったわけだし、大きくなるはずがないよね？　よね？！
「……さあ、何故でしょう。A、私が咄嗟に巨大化の魔法を掛けた。B、なんとなく大きくなった。C、どうやら私の掛けた擬人化の魔

法の影響で、私達に掛けられたじゃむの効果がこいつにも移ったようだ。あのじゃむには、縮小と巨大化の魔法を封じた香味料を加えてあり、その巨大化の魔法が私を通して感染した様子だ。本当なら打ち消しあうはずなのに、どうやら共存していたようだな。ふむ、興味深い、あとで調べておこう。さて、どれだと思う？」
明らかにC。Cじゃなかったら恥ずかしいくらいにC。
「正解だ」
へー、感染するんだ、魔法って。病気かなにかみたいだ。
とまあ、雑談はこれくらいにして、と。
「もぐらの大将に逃げられましたね」
僕としては物凄く悔しいところ。人の庭に穴掘ってさらに陥没させたんだから。許せん……。
「まあ、その内出会うだろう。やつが生きてる限り、私の邪魔をしにくるはずだ」
そうですか。じゃあ、その時を待つことにしますか。

しかしその時は、以外にも早く訪れるのだった……。

夕食を終え（我が家は7時に夕食だ）、部屋に戻る時、妹が声をかけてきた。
「お兄ちゃんお兄ちゃん！　実はね、今日お家の前で宇宙人拾ったの！」
「へーそうかー」
なにを言いだすんだこいつは……。
「嘘じゃないもん！　来て来て！」
妹に手を引かれ、部屋に引きずりこまれる。どうせ人形かなにかだろうな。
「じゃーん！　宇宙人でーす！」

見せられた虫カゴには、小さな人型のなにかが入っていた。それも、ごくごく最近見たものだ。
「……本当に宇宙人だねー。ねえ、お兄ちゃんに頂戴？　だめ？」
大のお兄ちゃん子である妹は二つ返事で僕に虫カゴをくれた。今度ゲームして遊んであげることを条件に。
「やあ、皇帝閣下」
「や、やあ、少年。こんなに早く再開するとは思わなかったよ」
冷や汗だらだら、手足ガクガクの宇宙人、否、もぐらの大将は恐怖に染まった笑顔を僕に向けてきた。
携帯を手に取り、電話帳からとめぽさんを選出、ダイヤル。
「……あ、もしもし。……いえ、今丁度ちょっとしたオモチャを拾ったんで、とめぽさんの実験室で遊ぼうかと……いやですねー、今日取り逃がした大将ですよ。……はい、はい、じゃあ今から行きますね。それでは」
プツリと交信を切り、虫カゴを脇に抱えて行ってきます。母さんはどこへ行くのか聞いてきたので、友達のとことテキトウに返す。
「ど、どうするつもりだ？」
不安顔のもぐらの大将。僕は優しく微笑みかける。
「とめぽさんと一緒にお人形遊び。お医者さんごっこだよ。注射したり手術したり……まあ、少なくとも早々と死なせないから安心してね♪」
もぐらの大将の悲鳴を完全無視して、僕はとめぽさん家のインターホンを押す。

弟子はまだやめないでおこう。危ないけれど、普通じゃ味わえないスリルと楽しみがあるから。
そして……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5268c/

隣のとめぽさん

2010年10月9日16時43分発行